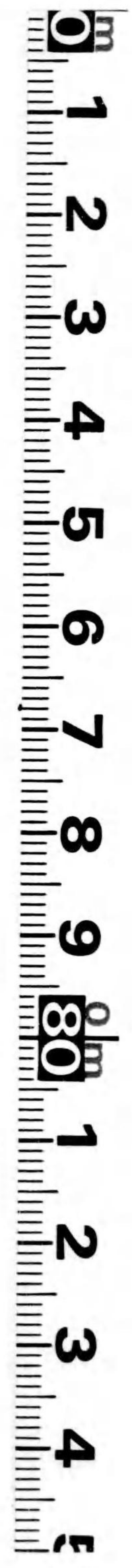


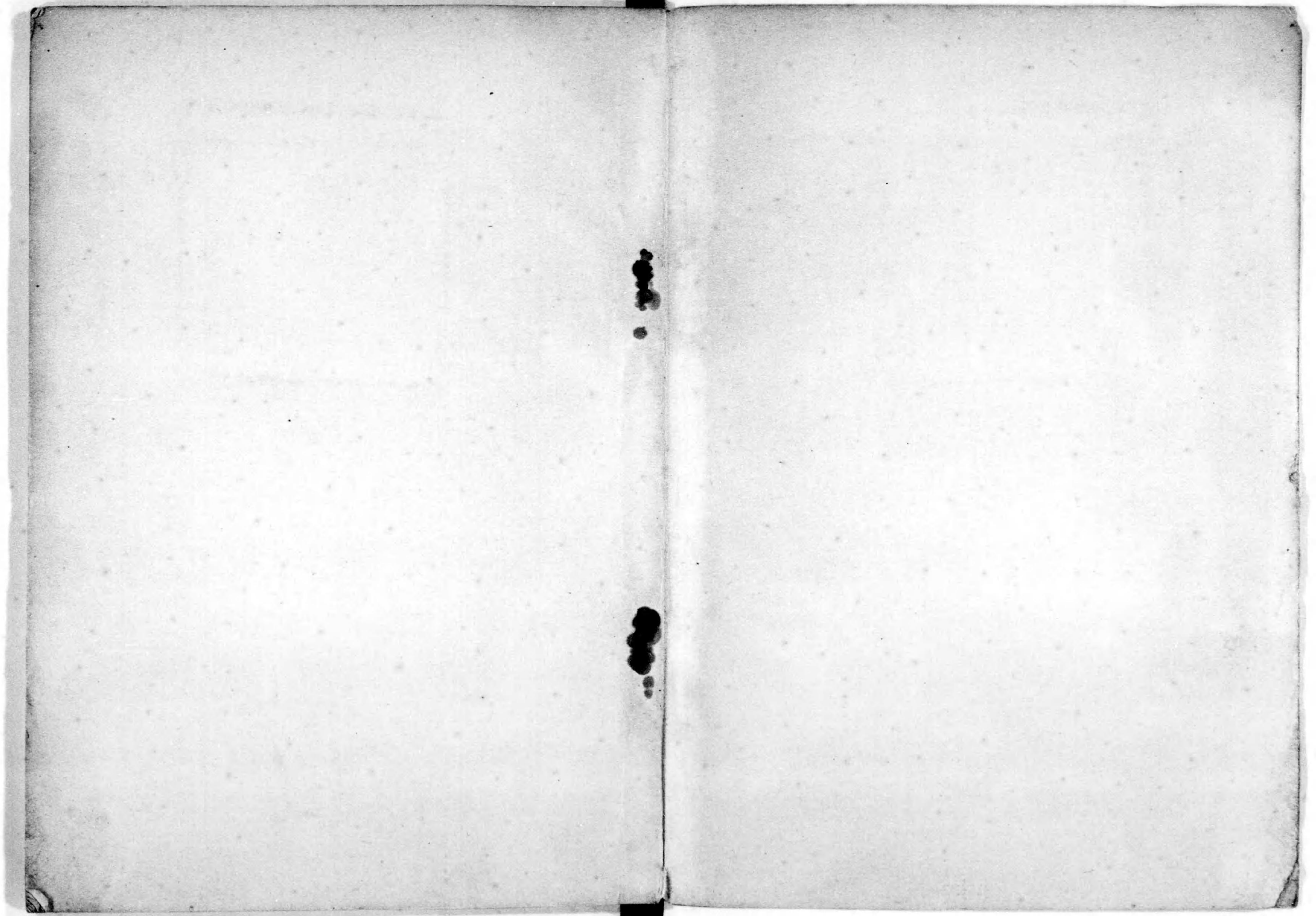
蛇の斑 またら

探偵叢書第十三篇



始





特100
97.



東京

高等探偵協會編

の

蛇

大正探偵叢書
第十三篇

中興館藏版

大正
5. 1. 17
内交

沼の中へ怪しき園を



とうとう尋ねあてた古い園の中には抑も何があつたか、緒方氏は此の古穴の中に下りて行つたが、暫くすると真青い顔をして上つて来た。あゝ穴中の惨死體！

斑の蛇 目次

- 一、怪しい婦人が尋ねて来た……例の緒方理學士の會見……一
- 二、怪しい婦人の怪物語……南洋から猛獸を取寄せた……八
- 三、婦人の姉の不思議の變死……恐しい斑の黄色い紐……三
- 四、眞夜中の怪しき口笛……大事件だ實際不可解だ……三〇
- 五、高見澤夫人の遺言状……結婚費は各二千五百圓……四〇
- 六、奇怪なる風穴と呼鈴の紐……緒方氏の怪室調査……四九
- 七、金庫の中には異常の物が……此の牛乳は誰が飲むか……五九
- 八、風穴を洩れた一條の火光……闇中の怪室に突入する……六六

九、悲痛極まる苦悶の叫喚……早くくピストルを……八三

一〇、鋭敏なる探偵徑路の説明……怪屋の怪事件終る……九一

穴中の惨死體

一、人と自動車の行衛不明……乗つた一人は三階に居る……九九

二、給仕の女は探偵の手初め……火をつけた男は誰れか……一〇六

三、沼池の中の怪しき圍る……腰まである水中に入いた……一二三

四、大穴中の自動車と人……粉微塵になつて死んで居る……一二〇

五、鍵裂きのある洋服の男……夫れが殺人の大罪人だ……一二九

六、兇漢馬場勝重の就縛……酸悲を極めた穴中の死體……一三四

目次終

斑の蛇

高等探偵協會編

尋ねて來た

一、怪しい婦人が早朝に尋ねて來た

……例の緒方理學士と和田醫師の會見

探偵王緒方緒太郎が、私を伴つて従事した様々な事件は、今一寸手控を繰つて見ただけでも、無慮七十餘件に達してゐる。其中には悲惨極る出来事もあれば、又頗る滑稽で、思ひ出すだに噴飯を禁じ得ぬ事件もある。併し孰れを見ても一種毛色の變つた珍妙

な事實で、一として平々凡々な物語は無い。それを又明々晃々大日輪の如き推斷力と、神速風の如き探偵法を以て、一々快刀亂麻を絶つ如く解決して來た緒方理學士の手腕に至つては、只管眼を睜つて驚嘆するより外は無い。この事に就ては、先に本書と同じ大正探偵叢書中に於て其一端として紹介した變怪極る『乃木大將肖像の秘密』事件、酸鼻眼を蔽はしむる『不思議の膏藥』事件、更に危く外交の一大危機を醸さんとした『外交の危機』事件、其等を熟讀された讀者の、既に已に御同感の事であらうと思ふ。

併し今將に私が此編に於て讀者に物語らんとするのは、氏が今迄に關係つた怪事件中の怪事件である。深夜ひとり眼覺めて此事

實を回想する時、私は今なほ悚然水を浴せられたらんが如き惡寒を感じ、幾度か危く叫ばんとする——それほど怪奇な戰慄に満ちた事件である。今これを『斑の蛇』と題して諸君に語らうと思ふ。

四月早々のこと、ある朝私が偶と眼を醒すと、枕元に何時來たのか緒方理學士が、チャンと着物を着換へて立つてゐる。置時計を見ると、まだ漸と五時を十五分過ぎたばかり、一體何時も寐坊の先生が何だつて今朝に限つて、此様に夙起したんだらうと、眠い眼を摩り摩り見上げると、氏は少々氣の毒と云つた風に私の顔を見て、

「イヤどうも此様に早く君を敲き起して濟まぬ次第だが、今朝は

脚ごつこに誰も皆おなじ運命に遭遇したのだ、初めに階下の主婦さんが敲き起される、次に主婦さんが僕を敲き起す、ソコで僕が君を敲き起す様な事になつたのだよ。』

私』して、何事だい、火事か？』

緒『イヤ、探偵事件の依頼人だ、今、年若の女が一人、尋常ならぬ様子で駆込んで来て、僕に面會を求めて居るのだ、いま階下の應接室に待たしてあるが、何しろ年の若い女が朝の今頃に市を歩き廻つて寐てゐる僕を敲き起すと云ふのは、餘程容易ならぬ緊急な事件に相違無いと思ふ。所で左様だとすれば君も最初から關係する方が御希望だらうと思つたから、態と急いで君を起しに

来たのだ。』

私『イヤそれは有難い、そんな面白さうな事件を聞き洩して溜るものか。』

眠い處を突然に起されて、ムシヤクシヤした心も、面白さうな事件と聞いては跡もなく一掃されてしまつた、私は又緒方理學士の明快な推理判断が如何に此事件の上に下されるかを想つて、油然たる興味と共に直様床の上に刎ね起きた、そして二三分間の中に衣服を整へて、緒方氏に躓いて階下の應接室に下りて行つた。

室の隅の椅子に、黒い喪服のやうなものを身に纏つて、おなじ色の厚布で覆面した婦人が腰掛けてゐたが、私等を見ると、急い

で立上つた。

緒方氏は極めて快活に、

『お早うございます、僕が緒方緒太郎です、これは僕の親友の醫師の和田君です、此人の前では決して遠慮は要りません、僕と同様何事も腹藏無くお話し下さいますやう。ヤ、主婦さんが火の準備をして呉れたのは有難い、サア何卒ズツ火の傍に御寄り下さい只今珈琲を温かくして差上げます、何だか御寒さうに震へて被居る御様子ですから……』

怪しの婦人客は云はれる儘に、椅子を近付けながら、殆ど聞きとれるか取れぬかの低い聲音で、

婦『震へて居りますのは、寒いからでは御座いませぬ。』

緒『エ、では何の爲だと被仰います？』

婦『私は餘りの恐ろしさに震へて居るのでございます、何と申上げてよろしいやら、身の毛が悚つのでございます。』

と答へながら、静かに覆面を取除けた婦人の顔を見ると實にや顔色は土の如く蒼白め、眼球は尋常ならぬさまに、キョトキョト絶間無く動いて、見るからに痛ましく溜えてゐる、齡の頃はまだ三十前後と見えながら、髪は年にも似合はず、胡麻鹽になりかけて、顔から肩のあたりにひどく憔悴が見える、そして一體の様子が弱々しく、いかにも年老つた女の様である。

緒方氏は例の機敏な探偵眼を敏捷こく働かせて、早何事をも洞察した如く、

『私の處へも出になつた上は、貴女はもう決して御心配には及びませぬ、私共が誓つて萬事を正しくなる様に取計つて差し上げます。』と、慰め口調で云ひながら、語を變へて、

『貴女は今朝汽車で御出でになりましたね。』

二、怪しい婦人の怪物語

……継父は南洋から猛獸を取寄せました

『貴女は今朝汽車でも出でになりましたね。』

と、突然に云はれて、婦人はひどく吃驚した體で、思はず緒方氏の顔を瞞め、

『では貴下は妾を御存知で被居いますか。』
と微かな震へ聲で問ひ返した。

緒「イヤ左様ぢや有りません、今貴女の左の手袋に挟んである汽車の往復切符の片端をチラと拜見して分りましたのです。』

緒方氏は平氣で答へて、更に、

『で、貴女は餘程早くも宅をお出になりましたね、そして御宅から停車場まで、随分ひどい泥濘路を蓋無しのガタ馬車でも出でになつたと想はれますが。』

婦人は茲に到つて飛立つばかりに驚き呆れ、暫くは魔法使でも見るやうに緒方氏の顔を、物をも云はずジロ／＼凝視めてゐる。
緒方氏は莞爾して、

「何もさうも驚きになる事は有りません、ただ御見掛けするところ、貴女のコオトの左の袖に七箇所以上も生々しい泥の痕が附いてゐます、ソナ風に揆を揚げるのは田舎の街道通ひのあの蓋の無いガタ馬車より他には有りません、ツマリ貴女がその左側にはかり乗つて居られたと云ふことが、それで判明なのです。」

手に取るやうな説明に、婦人も初めて首肯いて、

「まつたく貴下の被仰る通りに相違御座いませぬ、妾が宅を出ま

したのは四時前で、東神奈川の停車場へ着きましたのは四時廿分過ぎでございました、彼處で直一番の列車に乗つて中央停車場に参りましたのです、そんな事はともあれ、緒方先生、どうか此様な妾をお助け下さいまし、此儘に居りますならば、妾は氣が違つてしまひます、それに誰一人妾の相談相手になつて呉れる者もございませぬ、もつとも幾何か頼みになる人は一人居りますが、その人の力位では到底この怖ろしい事件を禦ぐ足しにはなりません、途方に暮れて居ります所へ、恰度先年春山の奥さん——あの方も大變危急な場合を貴下に救つて頂いたと承つて居りますが——から貴下のお話を伺つたのを想ひ出し、神様の手に絶つるつもり

で急いで此處まで参りました、お住居も昨日やつと春山様から伺つて参つたのでございます、ア、お願でございます、何卒妾をお助け下さいまし、妾の生命が助かりませぬ迄も何卒妾が今陥つて居ります暗黒の底に幾分かの光明を見せて下さいまし、お願ひでございます。只今の處では何程の御謝禮も差上げる事さへ出来ませぬが、今一二ヶ月の中には妾が結婚いたす事になりますのでさうすれば何分の財産だけは如何様にも取扱はれますので、其節は少くとも志だけの御禮は必ず致します。」

緒方氏は卓子の抽斗から小さいノートを取出して、暫し繰り返して居たが、

「ア、春山夫人の事件は、『猫目石の指環』の事だつた、併しこれは和田君、君が未だ僕を知らぬ以前の事なのだ、夫から貴女！」と婦人の方を向いて、

「只今の報酬云々の點に就ては、決して御心配に及びません、一體僕のする仕事が即ち僕にとつて報酬となる譯ですから、併し貴女の御都合の宜しい時に、僕が探偵に要した實費丈を御支辨下さると云ふことならば、それは決して御辭退は致しませぬ。では貴女のその怖ろしい事件の顛末を一伍一什伺ふことにしましやう。何卒探偵上何かの足しに成りさうな事は少しも洩れ無くこの兩人に御聞かせ下さる。」

「では申し上げますが、この事件について妾が何よりも甚く怖れて居りますことは、如何にも、其事實が不確かではんやりして居ることでございます、妾のかうまで恐れまする事の起因が實に可笑しいほど些細な事であることでございます、そのため妾が唯一人頼りにして居る方です、此話を申し上げます、それは貴女の神経だ」と云つて殆んど取合つて呉れないので御座います、併し億病な女の神経だ」と一口に云はれてしまふこの事が、今にどんなにか恐ろしい、身の毛が慄つ事件となつて来るか、妾にはそれがマザ／＼眼に見えるやうに想はれます。緒方様、貴下は人の心の奥底まで一眼で見徹しなされる方と承りましたが、今この妾の身

の廻りを圍んで居りまする危険を、どうして遁れましたら宜しいで御座いませうか、後生でございます、御教へ下さいまし。』緒「承知しました、どんな秘密でも必ず發いて御安心をおさせ申します。』緒方氏は腕を拱き、この不可思議なる婦人の、世にも恐ろしき物語を聴くべく靜かに眼を瞑ぢた。婦「妾は須藤蓮子と申しまして、只今は繼父と同居いたして居ります。繼父の名は高見澤信武と申しまして、由緒正しい舊家で、代々神奈川縣の都築郡に住んで居たのださうでございます。緒「あゝ高見澤家の御名は僕も伺つて居ります。』

緒方氏は瞑目した儘で云ふ。婦人は言葉を續けて、

「高見澤家も昔は武藏相模切つての豪家ださうで御座いまして、土地もなか／＼莫大なものだつたと申します。所が此四五代と云ふもの相續人に放蕩者ばかり生れまして、次第に身代を消耗して殊に先代などは相場に迄手を出して見事失敗してしまい、財産は悉皆人手に渡す、現今では僅かばかりの地所と百年以上になる古家屋が残つて居るばかり、それさへ此頃では抵當になつてゐると云ふ様な憐れな始末で御座います。先代は恐ろしい烈しい氣質の人で、他人の助もからず、貧乏に一生を送つたと云ふ事で御座いました。其獨息子の當主は——つまり妾の繼父に當ります——

何しても高見澤家を盛り返さねばならぬと云ふので、親類の補助で醫師になり、南洋へ出稼ぎに参りました。彼地では技術の巧いのだ、固前のしつかりした氣質とで、随分一時は繁盛もし、手廣くやつて居たさうで御座いますが、或時しげ／＼と盗難に會ひ、その嫌疑を家の下男にかけた結果、一時の怒りに任せて到頭其男を殴り殺してしまひ、ヤツトのことで死刑丈けは遁れましたもの、餘程久しい間彼地に入獄して居りまして先頃特赦されて日本へ歸つて参りました。それだものですから、今では甚く氣むづかしい、絶望し切つたやうな人間になつて居ります。

妾たちの實父は臺灣の守備隊の陸軍大佐で御座いしましたが、妾

達双児が生れると間もなく逝くなりました。母は妾達二人が二歳になつた時に連子をして高見澤家へ再縁いたしました。母は大變な財産家で収入は少くとも一ヶ年一萬圓はありました。それを私達の結婚費用にするやうに貯蓄し、残りは私達の食料として繼父に手渡し、一同内地へ歸ると間もなく山北で瀛車が衝突しました時に惨死を遂げました。それで繼父は東京に開業して居ましたのを廢して私達二人を連れて都築郡の古屋敷へ引つ込むと、母の遺産のお蔭で一家は何の浪風もなく、何不足なく幸福に暮らされた筈なんです。

所が、其後間もなく繼父は全然別人のやうに殘酷になりまして

「高見澤さんが歸郷て來た」と心から歓迎してくれる人々とは更に交際せず、終日家にばかり閉ぢ籠つてばかり居ましてたたく家外へ出るかと思へば近隣の人と劇しく口論するばかり、全く狂人としきや思へませぬ。精神病は多く遺傳するとか聞きますが繼父は熱帯地方に永く居た故で斯なになつたのかと思はれます。村人とは絶間なしの喧嘩口論、警察の御厄介になつた事も度々で御座います。それに非常な大力で、一度怒つたと來たら、手のつけ様がありません。つい五六日前も村の鍛冶職を小川に擲げ込みましたが、原因と云ふのは何でもないことなんで御座います。斯な風で村の人からは鬼の様に思はれ、朋友などあらう筈もなく、破

落漢や乞食のやうな者に庭園を貸したり、時には自分も其仲間入りをしたりするです。』

『加之に繼父は猛獸が非常に好きで、二三年前ワザ／＼南洋から豹だの大猿だのを取寄せまして、殊にそれを庭園に放し飼にするものですから、危険くつて、村の人達は父同様此獸をも恐がつて居ります。』

『こんなで御座いますもの緒方さん、姉も私も——双兒で私は妹分にしてありました——何の愉快も知らず日を送りました。雇人などは、ついぞ居付いたことも御座いせん、家の事は皆姉と私とで致しました。姉が死んだ時は三十歳前でしたけれど髪の毛は

もう白髪が見えて居りました。』

『オヤ一寸待つて下さい、おや姉さんは御逝なりなすつたんですね。』と、眼を瞞つてゐた緒方は訊く。

『左様で御座います。姉は二年以前に逝くなりました。これがまた誠に不思議で御座いまして、特に聞いて戴きたいので御座います。私達二人はついぞ交際と云ふことも知らず、唯一人實母の妹に當ります叔母が隣村に居りますので、時々遊びに行く位なものでした。姉は二年前降誕祭の晩に叔母の家で或る豫備の海軍少佐と見知り遂々婚約が成立つやうになりました。繼父も別段反對もなく、婚禮も一二週間の内になつた時に大變な事件になつて終

ひました。私の唯今の怖さもそれが原因なので御座います。』
椅子に凭りかゝつて黙然と耳傾けて居た緒方は、此時急ぎ立てるやうに、

緒「何卒事實を出来るだけ委しく仰つて下さい。」

三、怪婦人の姉の不思議の變死

……あゝ恐しい斑點の黄色い紐！

蕪ア、斯ふ話してゐます内にも其時のことが明瞭と眼に浮んで身内がゾクゾクと致します。唯今も申しました通り家は誠に廣く現今は片屋根ほか使つて居りませぬ。家内の様子は委しく申上げ

る必要はありませんが、唯寢室の事だけを申上げますと、家の中央の廣間から一番目が父、其の次が姉、其次が私の室で御座います。室の間は板壁で些とも通ひ道はなく、室は何れも一方は硝子窓で、其下は芝で其處から庭を見渡し、一方は建物の裏面に出た廊下に入ります。これでお分りになりますか知ら……。」

緒「え、大抵分ります、何卒御先を……。」

蕪「姉の死にます晩は繼父は早くから寢間に入りまた。併し床へは入らなかつた様子で印度蓑の烈しい臭で姉は堪りかねて私の室へ來まして、自分の結婚の事など機嫌よく話して居りましたが、十一時になると自分の室へ歸つて行かうとして、入口の所で立止

まり。

姉「蓮ちゃん、汝この頃眞夜半に口笛を吹いてゐるのが聞えないかい。」と云ふのです。「いゝえ。」と私が申しますと「私は又、汝が夢中で吹くのかと思つたよ。」と申します。私が「そんな筈はない」と申しますと、姉はこの二晩三晩夜半の三時頃になると何處からとなく口笛の音がして、隣の室とも思へれば庭の方からとも聞かれる、私にも聞えるか訊いて見やうと思つて居たと申します。私は「口笛なんぞ聞いたこともありませんが、多分庭の乞食共が吹くのでせう」と答へますと、姉は餘程それが氣に掛つたものと見えまして、「だつて庭からなら汝にだつて聞えるぢやないか。併しそ

んな事は何だつて可いわ」と私を見て莞然と笑ひながら室を出て行きました。が、間もなく自分の寢室に錠を降す音がしました。

蓮「エツ錠ですつて、何時も貴女方は錠を降して御寢みですか。」

緒「え何時も。」

緒「何故です。」

蓮「先刻も申し上げました通り、繼父が豹だの大猿だのを放養ひにしますので、寸時も油斷が出来ません。」

緒「成程、成程。何卒御先を。」

蓮「蟲が知らずとも申しますか、其晩に限つて如何しても寢付かれませぬ。何だか斯ふ淋しくて、殊に其晩は大變な暴風雨で御

座いまして、風は吼えるやうに吹きますし、雨は硝子窓に小砂礫を打つけるやうに降ります。此騒々しい中に突然物凄い婦人の悲鳴が起りました。而も其聲は確かに隣の姉の聲です。私は思はず床から匆ね上つて有り合せの肩掛を引掛けたなり廊下に飛び出した途端、姉が先刻云つた様に口笛の音が明瞭と聞えました。ハツと思ふ間もなく今度は锵々と云ふ音がしますと同時に姉の寢室の戸は錠が廻つて自然と開きました。私は廊下のランプの薄明りで姉の室を覗き込むと思はず總身がゾツとしました。姉は死人の様に青白くなつた顔色に、何か助ける物をつかみさうに両手を振り廻し、泥酔ひのやうによろけて、私が吾知らず走り寄つて抱擁へや

うとした時、姉は腰がもう立たなくなつたのか、グツタリと座つて苦しさに身悶えして『ア、苦しい、蓮ちゃん、紐だつた。斑の紐！』と斯ふ云つて四肢は一時に痙攣を起しましたので、隣の父の室を指さしながら、私の両手を確かりと掴んで、姉『ア、苦しい。ア、恐ろしい。蓮ちゃん、紐だつたよ。恐ろしい紐、黄色い紐だつたの。斑らな黄色い紐だつたのよ。』斯ふ息も絶え絶えに口走りますと、痙攣を起しました身體は、次第に剛直つて來まして、私が。
蓮『姉さん。姉さん。』と呼ぶ聲も耳に入らぬのか、兩眼を恐ろしく釣上げまして、自由の叶はぬ手を無理に動かして、隣室の壁の

上を指すと其儘絶入つたやうになりました。父も私の呼聲に周章
 が出て来まして、寢衣のまま、姉の側に駆け寄りブランデーを口に
 灑ぎ入れましたが、姉は眼さへ開きません。後で駆け付けた醫者
 が何の役に立ちませう。姉は遂々そのまゝ彼の世の人になつて終
 ひました。』

蓮子の物語は、一寸途切れたので、緒方氏は

『その口笛と金屬の鏘々と云ふ音を御聞きになつたのは、確か
 でせうね。決して間違ひはありませんまいね。』

蓮『それは確かに聞いたに違ひありません。あの暴風雨の音の中
 でも明瞭と聞えたのですもの、決して間違へる筈はありません。』

緒『ハ、ア成程。さうして姉様は、着物は着てゐらつしやいまし
 たか。』

蓮『否、寢衣のままです。さうして右手にはマッチの燃えさしを
 左手にはマッチの箱を持つて居りました。』

『さうして見ると變事の起つた時に直ぐ燈を點けて周圍を見ても
 のと思はれますね。これが大切な點の様に思はれますが、警察で
 は如何云ふ意見でした。』

蓮『繼父は直ぐ警察から眼を付けられて嚴重に取調べを受けまし
 たが、何の證據もない事ですし、其まゝになつて居ります。何し
 る室の入口は内側からキチンと錠を降してありますし、硝子窓も

扉が閉ぢて鐵棒が嵌めてありますのが、其儘になつて居ますし、壁も床も異常がありませんねもの、誰を疑ひ様も御座いませぬわ。その上、何處に一つ創らしい所もありません、暴行を加へられた風もありませんのです。斯うなつて見ますと、姉は全く一人で死んだと考へる外はありませんね。』

緒「ウーン……全く奇怪ですね、ぢや毒殺の疑ひはありませんでしたか。』

四、眞夜中の怪しき口笛

……愈々怪事件だ！實際不可解だ！

緒「それも警察醫の御調べではそんな形跡は少しもないと云ふことです。』

緒方緒太郎氏は、此の蓮子の返答を聞いて深く考へ込んだ。

緒「フ、ン。如何しても毒殺らしい原因といふものが發見からないのでですね。他殺らしい疑問もないとすると、それに姉様の身體には何處に一つ創跡らしいものも見えない。フ、ン。』

蓮「え、それは身體中を捜し廻りましても、コレと云つて暴行を加へられたり、又擦り創らしい跡一つさへも見えないので御座いますよ。』

蓮子嬢は、今も猶ほ其の當時の事を思ひ出すと奇怪に堪えぬか

のやうに、また恐怖さに堪えぬかのやうに、顔色蒼醒め、身體を微かに打ち戦かして、緒方探偵王の顔を凝つと瞞めてゐる。

緒方緒太郎氏も、凝つと蓮子嬢の顔を見返しなから

緒「繼父さんは、それに就て何か御考へがあるやうでしたか。」

蓮「否、別に。唯、警察醫の云ふことを黙つて聞いてゐる許りでした。」

緒「警察醫は別として、貴女の御考へは如何です。」

蓮「私は其時全く怖えて甚く神經を刺撃した爲めに、死んだものと思ひました。併しその原因は全く分りませぬ。」

緒「その乞食だの破落漢などは、夜でも庭を徘徊して居るので

か。」

蓮「え、大抵は何時でも居ります。」

緒「ハハア、それぢや姉さんが死ぬ刹那に仰言たといふ斑の紐と云ふのは何の意味だか貴女に思ひ當りませぬか。」

蓮「左様ですね。私は姉が苦痛の爲め無意識に口走つたのかとも思ひました、又乞食共が鉢巻にする豆絞りの手拭の事かとも思ひました。」

緒「如何も容易ならぬ事件のやうです。」と緒方緒太郎は絶體に蓮子の語には同意出来ぬものゝやうに、頭を打振り、

緒「サア、それでは御話の續きを拜聴ひませう。」

緒方緒太郎の言葉に連れて、蓮子は更に恐る可き事件の成行を次の様に話し出した。

『それから二年も過ぎましたが、其間私は一層淋しい月日を送つて参りました。すると此頃ある親友から結婚の相談を受けまして、夫となる人は秋田武太郎と申しまして平塚の秋田傳之助の次男で御座います、継父は今度も異存がありませんので今春中に式を擧げるやうになりました。所が姉の結婚前と同じく又もや大事件が突発りました。夫れは修繕する所があるとかで二三日前から大工が入りましたので、私も仕方なしに姉が變死しました氣味の悪い室へ入つて寝なければならぬ事になつたのです。その氣味悪

さつたらありません。私は姉の死んだことなどを考へて眼も合はさずに居ります、丁度あの時と同じやうな時刻なんです。姉が死ぬ前に聞いたと云ふ口笛と同じ音が聞えるぢやありませんか。私は直ぐ刎起して、ランプを點けて室中を見廻しましたが鼠一匹居やしません。もう床へなんぞ入つては居られませんから夜の明けるのを待兼ねて春山様から聞いて居りました貴下に御願ひするより外はあるまいと、逃げるやうにして参りましたので御座います。』

『宜うこそ左様なさいました。夫から最う他に御話はありませんか。』

『もう、お終いで御座います。』

緒方緒太郎は暫く沈黙つて両手に頰を埋めたまゝ、ストーブの火を贖めてゐた。

蓮「愈々大事件だ。相當な手段を取るには種々の事實を確かめなけりやならぬが、併し今は一刻も延ばす場合ぢやありません。宜しい、これから私共は御宅へ伺ひませう。そうしたら継父さんに知れぬ様に、家の中の模様を拜見出来ませうかね。」

蓮「え、それには丁度都合が宜いのです。継父は今日は是非来なければならぬ用事があるとかで、東京へ来る筈ですから、今日一日は邪魔になる者はありません。老人の番人が居りますけれども少し馬鹿な方ですから……。」

緒「結構、結構。和田君、君も厭ぢやないだらうね。」

緒「如何して厭なところか。」と私は答へた。

緒「それぢや私達二人で参ります。他に貴女は御用が御ありでせうか。」

蓮「否、それでは直ぐ歸つて御待ち申して居りますから。」

緒「え、如何か。それに少し準備して置く要事もありますから、

正午過ぎに参ります。」

須藤蓮子は早くも再び黒いベールに面を包み、緒方氏の語を後に残して、インクと出て行つた。緒方氏は其姿を見送り

緒「和田君。君は此事件を如何觀察するかね。」

和「僕の考では天下最も下可解にして、且つ最も恐る可き兇行だね。」

緒「ウン、左様だ。實際不可解だ。そして大兇行だ。」

和「併し、彼女の云ふ所に間違ひなく、床も壁も窓も入口も、總て丈夫に出来て居るとすれば、姉の死は單獨で死んだと思ふより他はないね。」

緒「それぢや、君は眞夜半の口笛と、姉の死際の不思議な語とを何と解釋するのだ。」

和「僕には全然見當がつかぬね。」

緒「この口笛と高見澤の愛する乞食の群とを結びつけると、高見

澤には此の繼子姉妹の結婚を妨げるのが利益だと思はれるね。蓮子嬢が聞いたと云ふ金屬の音は、窓の鐵の門を嵌めなほした音ぢやあるまいかね。何れにしても此點が肝心だと思はれる。」

和「併し乞食は如何してそんな事をしたんだらう。」

緒「そこ迄は未だ分らない。」

和「併しそんな事が出来るだらうか。疑はしいね。」

緒「僕も左様は思ふんだが、これから都築郡へ出懸けて、家を一検査してやらう。」

此時緒方氏は突然入口を振向いて、

緒「ヤア誰だ、怪しからん。」と大聲に怒鳴つたので、其方に向く

と手荒く突き開けられた戸の外には、小山の様な巨漢がヌツと突立つて居た。

五、高見澤夫人の遺言状

……双児の結婚費は各二千五百圓

扱て其巨漢の服装はと見れば、黒の山高帽に長いフロツクコート、膝をも隠す長靴に、手には狩用の鞭を打振り打振り、大きな顔は日に焦け、深い皺は顔一面に波の如く刻まれて、深く落ち凹んだ氣味悪い眼で、私達二人をジロく見廻す相貌は物凄く、肉の落ちた高い鼻は、猛禽鳥のやうな險しさである。

私達二人が密談中の扉を突き開けて、扉の外に突立つたまゝ凝つと室内を睨んだ此老人の顔の物凄さと云つたら一と通りではない、何か心中に深く憤つて居るやうな事件でもあると見えて、猛禽鳥のやうな險しい鼻を蠢動し、下唇を噛み締めて、齒をむき出し、一文字形の眉を擡めて、何か云はうとするのを、憤怒の爲に舌の先が剛直のを堪え、堪えてゐるやうに見える。

やがて、一足進み出ると、

男「何方が緒方といふ人かな。」と其男は喚く。

緒「私が緒方緒太郎です。そして貴下は？」

男「乃公は都築郡の高見澤信武だ。」

緒方氏は急に丁寧な言葉や態度で、

緒「ハハア、左様ですか。サア何卒お掛け下さい。」

高「否そんな事は如何でも可い。乃公の娘が来た筈だ。私は跡をつけて来たんだ。君に何を、何んと話したか、サア聞かせて呉れ。」

緒「今年は時節はづれに寒いです。斯ふ云つて緒方氏は聞えぬ風をした。」

高「オイ、娘はどんな話をしたのだと云ふのに。」

緒「併し躑躅はもう咲き初めたと云ふのに。」

高見澤信武は溜り兼ねて、手にした鞭を打振り、憤然として一足進んだ。

高「宜し、貴様は乃公を誤魔化す積りだな。悪黨奴、干涉好きの緒方！」

緒方氏はこれ聞いてニコ／＼笑つた。

緒「アハハ、貴下のお話は仲々面白いですな。お歸りの時は戸を能く閉て行つて下さい。隙間の風は寒いもんですからね。」

高「出て行けど云はんでも用さへ濟めばサツサト出て行く。貴様は私の仕事に干涉な。娘は確かに此家へ來たに違ひないんだが、若し間違つたことをしたら承知しないぞ。よく氣を附ける。」と云ひながら、急に走り寄つて鐵の火搔棒を取上げ、針金の様に折り曲げて、

高「これを見ろ。貴様なんぞ乃公に抵抗が出来るもんか。」と嘲笑
けりながら悠々と立去つた。

緒方氏は笑ひながら、「可哀想な人物だな。僕は身體があんなに
大きくないが、併し先生が今少し長く居るなら、僕の握力は彼奴
の握力より弱くないと云ふことを見せてやるのだつたらうに。」と
打笑ひ、曲げられた火搔棒を取上げ、苦もなく真直に伸した。

緒「サア和田君、僕等も朝食を済ませよう。それから遺産處分登記所
へ行つて見やう。何か新研究に値す可き此事件の關係を發見する
かも知れないからね。」

緒方氏は斯ふ云つてカラ／＼と打笑ひ、火搔棒をストウブの以

前の位置に置き、

緒「ねえ和田君。彼奴が僕等を探偵と間違えるのは實に失敬極まる
次第だ。併し君此事件は仲々興味のある面白い事件だぜ。可哀想
に蓮子さんは彼の先生に跡を追けられて居るんだ。併し蓮子さん
の無用心に對し難義をかけさせないやうにしなければならん。そ
れは僕等の責任だからね。」

そして私達二人は種々此事件に就て語り合ひながら朝食を終
へると、緒方氏は直様戶外へ出かけて行つた。

緒方緒太郎氏が朝食後出て行つて歸つて來たのは午後一時であ
つた。氏は手に青紙を一枚持つて居たが、其上には文句と數字と

が書いてあつた。

緒「僕は高見澤夫人の遺言状を見たが、夫人の死亡なつた當時は年に一萬圓許りの収入だつたが、今では農産物の相場の下落の爲に七千五百圓以下となつてゐる。それに娘の結婚費には二千五百圓宛請求する権利が娘達にはある。そこで二人の娘達が結婚するとなれば、老爺さん喰扶持に離れなきやならぬとも限らぬ。」

「例へ一人にしても随分堪えるからね。サア僕の調査は無益ぢやない、老爺さんに僕等が關係することを知られた以上は、愚圖々々しちや居られぬ。直ぐ出掛けるこしやう。和田君、ピストルを一挺御用意を頼むよ。何しろ火搔棒を曲げる先生なんだからな、

ピストルの御見舞が先生に相當して居るよ。」

私達二人は今發車といふ時に、中央停車場に駆け附けて早速國府津行きの列車に飛び乗つた。間もなく教へられた停車場に降りて馬車を雇ひ、都築郡へと馭者に命じて急ぎに急いだ。緒方氏は先刻から帽子を前下りに冠り願を埋めて黙想してゐたが、聴て何者をか發見したやうに私の肩を叩き、「あれを見給へ」と前面を指した。見ると老木の茂つた丘の上に、高い屋根や古風な破風が見える馭者はそれと見るより、

「あゝ彼れは高見澤家の邸宅です。」

緒「ハハア、彼れが左様か。成程普請をして居るな。彼家へやつて

くれ。』

緒「彼家なら、向ふに廻るのが眞實ですけれど、此阪を登つて上の野原を徒歩なさる方が近道です。ホウラ、今女が歩いて居る、彼所が裏門です。』

緒方氏は手を翳して、

緒「あの女は確に蓮子だ。それでは汝の教へた通り裏門から行かう。』と云ふと、馭者は心得て阪の下に私達を降ろし代金を受取るや否や、忙がし相に元來た路を歸つて行つた。緒方氏は阪を登ると蓮子に近寄り

緒「ヤ、これは蓮子さん。今朝程は失禮致しました。丁度御約

束の通り参りました。』

蓮子は嬉しうに

蓮「マア宜うこそ。都合は大變宜敷ふ御座います。繼父は東京へ出懸けまして夜でなけりや歸りません。』

緒「ア、左様ですか。實は今朝程高見澤さんの御來訪を受けました。』と無雜作に語りながら、眼を凝つと對手に注ぐと、果して蓮子は唇の色まで變へて打驚いた。

六、奇怪なる風穴と呼鈴の紐

……緒方理學士、怪室の實地踏査

蓮「まあ如何しませう。それでは又継父が妾の跡をつけて……。」
緒「え、左様らしいのです。」

蓮「實に繼父は機敏こいのです。どうしても私は父の目を免れる事は出来ませぬ。今夜歸つたら、如何な事をしますか……。」

緒「御安心なさい。今夜は貴女は自分の室に入つて内側から錠を降ろしてお置きなさい。その上にも暴行をなさるやうなら、私達が貴女の伯母様の御宅へ御連れ申します。サア夫れよりも一刻も早く御宅の模様を拜見しませう。」

そこで緒方氏と私と蓮子嬢の三人は、高見澤家の邸宅へと近寄つて見ると、建物は蒼蒸した灰色の石造で、中央に高い部分があ

り、そこから左右に翼の様に家根が出て、一寸蟹の様な形の家である。左の家根は壊れたまゝ、硝子窓も大抵は壊れて、板で以て防いである。中央の高家根は稍や修繕を加へたらしく、右の屋根下全部が家族の住居で、窓も比較的流行風な窓で扉も完全に閉り高い煙筒からは淡い煙が立昇つてゐる。家根の端れに棧架があるが別段に大工が仕事してゐるらしい風もない。緒方氏は彼方此方と彷徨いて後窓に近寄り綿密に検査しながら、蓮子に質問する。

緒「之が一昨夜まで貴女が御寝みになつた室で、此中央が姉様、此方の端が繼父さんですな。左様ですな。」

蓮「え、左様です。さうして昨夜は私が此中央の室に寝ました。」

「緒」普請は中止と見えますね。それから此貴女の室は別に修繕する必要もなさそうに見えますね。」

「緒」左様です。何にもなかつた筈なのです。唯妾を次の室に移す口實と思ふ外は御座いませぬ。」

「緒」如何にもさうらしいです。此寢室の入口は廊下の方に開いてゐますね。その廊下には裏庭面から窓が開いてゐるでせうね。」

「蓮」ありますが、狭いので逆も人なんぞ潜れさうにも御座いませぬ。」

「緒」成程、イヤ假に人が通れても貴女方が戸に錠を下ろされるとすれば安全な譯です。一寸御面倒ですが、室内から此窓扉を閉め

て下さいませんか。」

蓮子嬢は急ぎ室内へと入り窓扉を閉ち門を嵌めた。緒方氏は外から硝子窓を開け、次の窓扉を力を極めて押したが、更に開きさうにもない。今度は小刀で門をはづさうと試みたけれど、是れ又失敗に終つた。氏は蟲眼鏡で合せ目を仔細に調べて見たが、縁の鐵は何の異常もない。流石の緒方氏も頭を抓ひで考へ込んだ。そして嘆聲を洩した。

「之ぢや僕の見込はすつかり外れちやつた、こんな窓扉に門さへ嵌めてあれば何者が來たつて入る事は不可能だ。若し内部から手係りになるやうな物を發見なかつたら全く手を束ねる外はない。」

私達は建物の狭い横の入口から廊下に入った。此廊下に彼の三個の室へ入る入口がある。緒方氏は直様第二番目の蓮子が昨夜寝たと云ふ室に入つて行つた。割合に狭い、天井の低い室で何の飾もなく、此方の隅に褐色に塗つた匣付の箱や衣桁や、小枝細工の寢椅子を置き、三番目の継父の室の壁に近く白布の覆ひのしてある低い寢臺が置いてある。周囲の壁は栗色で、蟲の喰つた檜であるが、古くて色褪めてゐる。此建物を建て、以來未だ一度も取換えないことが分かる。

緒方氏は椅子を一脚片隅に寄せて腰かけ、ギロ／＼と室内を隅から隅まで見廻した。上下の天井や床にも注意の眼を配つてゐる。

遂に眼を寢臺の枕の上に垂れ下がつてゐる呼鈴の綱につけて
 緒「あの呼鈴の綱は、何處に通じてゐますか。」
 と訊ねた。

蓮「それは家番の所へ通じて居ります。」

緒「他のものより新しいやうに見えますが。」

蓮「左様です。あれを付けましたのは僅か二年前の事です。」

緒「姉さんが御望みだつたのだらうと思ひますが如何でせうね。」

蓮「否。姉がそれを使ひます音を聞きました事は御座いません。」

妾達は何時も入用の物は、自分達が勝手に取つて來ることに致して居りましたから。」

「精」ハハア成程。それぢや斯んな立派な呼鈴の綱を附ける必要がないと思はれます。一寸此室に就ても充分満足の出来るやうな點まで調べますから、暫く失禮いたします。」と蟲眼鏡を取出して、俯向きになり、板と板との間の隙間を細かく調べながら、床の間の上を匍ひ廻り、又壁の上をも同様に細かく調べた上で、それから寢臺に上つて暫く見詰めたが、又もや壁の上下を眺め渡し、最後に力任せに呼鈴の紐を引いて、

「精」オヤ、此紐は引いても鈴は鳴らないぞ。役に立たない紐ぢやないか。」

「蓮」鳴りませんか。」

「精」鳴らない所ぢやない。此紐は針金にさへも附いてゐません。これは面白いぞ。丁度此通風穴の小さな口のある所にチャンと結びつけてありますぜ。」

「蓮」オヤ、これは不思議！。妾は少しも氣がつきませんでした。全く番人の室の鈴に繋がつてゐるとばかり思つて居りました。」

「精」奇怪！ 奇怪！ 此室に不思議な事が二つある。先づその通風穴を御覽なさい。通例ならば、外氣を流通させるために、庭の方へ開けるべきものを、何故か次の室へ開けてある。これでは通風穴の効用がない。何のために、此の室と隣りの室と空氣を流通

させる要があるだらう?。』

蓮「それも近頃の事なんですよ。」

緒「ちや通風穴も、呼鈴の紐と同時に出来たのですね。」

蓮「え左様です。其時分に四五個所改築を致しました。」

緒「何にしても餘程不思議だ。役に立たぬ紐と、外氣の流通しな

い通風穴。如何にも奇怪千萬だ。蓮子さん、御免を蒙りまして、

サア一つの次の室を拜見させて頂きます。」

緒方緒太郎氏は、心せく様に急ぎに急いで、自分が先きに立ち

ながら、黙々として高見澤信武の寢室へと進み寄り、其扉の把手

に手をかけて、グツと戸を引き開けた。

七、金庫の中には異常の物がある!

……此の牛乳は誰れが飲むのか?

高見澤信武の寢室は、義理ある姉娘の寢室よりも廣かつたが、

其設備は矢張り質素のものであつた。眼についたものとしては、主

なるものは折寢臺に、多くの醫學藥學の書物を一杯に並べた木製

の書籍棚、それに寢臺の側にある安樂椅子、壁に對する質素な木

製の椅子、大きな鐵の金庫などであつた。緒方氏はユルユルと室

を一週し、非常な興味を起したと見えて、一つく丁寧に調べ廻

り、遂に金庫を叩きながら

緒「此處に何が入つて居るか、御存知ですか。」

蓮「父の事務用の書類でせう。」

緒「オヤ、それぢや貴女は金庫の内部を見ましたか。」

蓮「ずつと前に唯つた一度見ましたが、書類が一杯あつたやうに覺えてゐます。」

蓮「この中に猫でも居ませんか。」

鐵製の小形な金庫を指して、猫でも入つては居ませんかとは、何の事やら想像もつき兼ねるやうな奇問である。平常、明敏神の如く快刀亂麻を斷つやうな清明透徹な緒方緒太郎氏の頭腦を信頼してゐる私と雖も、緒方氏が此金庫を見て何を考へ、何を發見し

たのか、其判斷に苦しむやうな奇問である。

此紛亂錯雜した異常な出來事に遇つては、流石の探偵王緒方氏も餘程困つたのだらうか、と顔を見上げると、氏はニコ／＼としてゐる。

緒方緒太郎氏の奇妙な質問に蓮子も、果して眼を丸くした。

蓮「何故で御座います。奇妙な事を仰言いますが、イ、エ、そんなものは居りやしません。」

緒「貴女、これを御覽なさい。」と緒方氏は金庫の上にあつた牛乳の小皿を取上げた。

蓮「否、猫は妾達の家では飼つて居りませんが、豹と大猿どが居

ります。』

緒「バア、それは先程もお聞きしました。豹も大猿もあの様に大きな獣ですから、たつた一皿の牛乳では到底も飼はれは致しません。一つ確めて置きたい事がありますから。』

と、緒方氏は木製の椅子の前に座り、非常に綿密に床の上を調べ出した。聴て

緒「有難ふございました。分つた、分つた。これで全部分つた。

この金庫の内部には非常に面白いものがあるぞ。』

と、獨り言を言ひながら、緒方緒太郎氏は立上つて虫眼鏡をポケットに納め、寢臺の側から、其處に吊下がつてゐる小さな犬鞭を取上げた。此犬鞭は自然に曲つて紐鞭の輪となるやうに結び付けてある。

緒「和田君。君は此鞭を如何思ふね。』
和「唯世間普通の鞭ぢやないか。唯、其先の結んである理由が分らない。』

緒「そんなに普通の鞭ぢやないよ。あゝ實に悪いことだ。智慧のある者が罪悪と云ふことに其腦髓を使用すると、斯んな恐ろしい事が出来るんだ。蓮子さん此室も充分に調べましたから、御免を蒙つて、今一度庭園を拜見させて戴きます。』

私はこれ迄、緒方氏が其取調べの場所から歸つて來た時ほど真

面目な顔色を今日迄に見たことは無かつた。私達三人は庭園を何回どなく往復して歩き廻り、私も蓮子嬢も緒方氏の黙想に耽るのを邪魔せぬ様に、何處迄も無言で附随して廻つた。

緒「蓮子さん。貴女は此から總て私の助言に就ては、嚴重に御守りなさることが必要ですよ。宜う御座いますか。」

蓮「え、それは必つと守ります。」

緒「此事件は一刻も躊躇の出来ない程に差迫つて來てゐます。貴女の生命は從順に私の助言を守るか守らないかに依つて定まるのです。」

蓮「必つと貴下の御命令通りに致します。」

緒「先づ第一に云ふことは、私も和田君も貴女の御室に寝ることでです。」

緒方氏は打驚く蓮子嬢や、私を眺めながら

緒「驚かれるのは御尤もですが、今其理由を申し上げます。一寸其前に御尋ねしたいのは、向ふにあるアレは旅館でせうね。」

緒「え、あれは芹屋といふ宿屋で御座います。」

緒「貴女の室から、彼旅館は見えるでせうか。」

蓮「え、よく見えます。」

緒「それでは貴方は繼父さんが歸られたら頭痛がすると云つて、あの姉様の逝くなつたといふ室へ引籠つて居て下さい。それから

繼父さんが御寢みになる爲に自分の室へ入られるのを御聴きになりましたら、ソツと窓の扉を開けて窓際へ洋燈を出して私達に合圖をなさるのです。そして貴女は御入用の品だけを持って、その以前の貴女の御室へ移つて居て下さい。之は極めて静かに、御繼父さんに氣附かれぬように、しなくては不可ません。無論修繕中でせうが、一晩位は如何にでもなるでせう。其後は私達二人で引受けます。

蓮『そして貴下方御二人は如何なさいますか。』

蓮『私達二人は御室の内に居て、貴女を騒がした夜半の物音を突き留めるのです。』

蓮『緒方さん。貴下はもう何も彼もすつかり御承知になつた事と思ひますが、何卒仰しやつて下さいまし。姉は如何して死んだのでせう。』

緒『申上げる前に今少し證據を明かにしたいと思ひますから。』

蓮『それぢや。姉は矢張り不意に驚いたのが原因で亡くなつのですか。』

緒『否。私は左様は思ひません。モット確かな實際の原因があつて、危害を加へたのだらうと思ひます。さア蓮子さん、それでは御免を蒙りました……。若し今此處へ高見澤様が御歸りになつたら、私達の勞力は全く徒勞に歸して終ひます。何にせよ蓮子さん

確かりして、先刻申し上げた事を巧く實行て下されば、貴女の危険は悉皆消失なると云ふものです。』

嗚呼、無用な通風穴と呼鈴紐。而して一見何の奇もない鐵製金庫と犬鞭とは怪しき深夜の口笛や、悲痛無残なる美人の死と何の關係があるものであらう？。而して悲痛なる最後に姉なる人の絶叫した斑の紐とは、抑も何であるるか、あゝ不可思議なるは、怪屋高見澤家の室内なる哉。

八、通風穴を洩れた一條の火光

……眞闇黒の怪室に緒方學士の侵入

緒方緒太郎氏と私とは芹屋といふ田舎臭い宿屋へ入つて、居室と寢室とを借り受けることにした。芹屋は二階建の宿屋で、私達の室から、高見澤家の門も邸宅も一目に見渡されるのであつた。夕暮方になると高見澤信武は、私達の乗つて来た、あのガタ馬車に乗つて歸つて来た。馭者は門を開けるのに大分困つてゐるのを見るより高見澤信武は荒々しい大聲で喚きながら、兩手を振り上げて馭者を罵つて居るやうであつたが、間もなく馬車は歸り、高見澤氏の姿が門内に消えて、二三分も経つと座敷にはランプが燈つたと見えて、樹間にバツと光の輝くのが見えた。私等二人は燈火もない眞つ暗な室の中で談話を初めた。

「緒」和田君。實は今夜君を連れ出すことには僕は躊躇するね。確かに意外な危険物があるんだから。」

「和」僕が加勢するから可いぢやないか。」

「緒」所で一人でも二人でも同じ理由なんだが。」

「和」それぢや唯、御供だけするさ。意外な危険物つて、君は確かにアノ室内で僕の氣が附くより以上の何物かを発見したんだね。」

「緒」否、別段に異常のものを見たと云ふのぢやないさ。僕の見たものは、君も皆んな見たらうと思ふんだがな。」

「和」僕は呼鈴の紐の外は別段に著しいものも見なかつたが、あれだけは未だ全然想像が附かぬよ。」

「緒」それだけぢやあるまい。通風穴も見たらう。」

「和」ウン、それは左様さ。併し室と室との間に通風穴のあることは格別に不思議とも思はんし、假に彼の室だけとした所で、あれでは鼠の通ふ位で、あれぢや何も出来ないぢやないか。」

「緒」所で、通風穴が彼の室にあることは、僕は室を見ない前からチャンと知つてゐたのだ。」

「和」オヤ又かい。宜く擔ぐ男だな。」

「緒」左様さ。僕は確かに信じて居たんだ。だが、まさかこんな事とは思はなかつた。蓮子嬢の話に姉が死ぬ晩の宵の口に、蓮子の室へ来て繼父の印度蓑の臭がひどいと云つたといふぢやないか、

其時から僕は室の間は聯絡が取れて居るんだなど知つたのだ。無論通風穴位の物だらうとは誰しも考へるさ。併し其の穴が大きいければ、其の時警官が見逃す筈がない。小さいければこそ見逃されたと云ふものさ、ハハハハハハ。」

和「其通風穴が何故危険なんだ。」

緒「何故つて？。そりや左様さ、妙に事實が暗合するぢやないか。」

緒方氏は私の顔を凝つと瞞めて

緒「總ての事件を歸納的に考へて見給へ。實に巧く出来て居る。

ソラ不必要な通風穴が出来た。その上から紐が吊下がつて寢臺の上に垂れてゐる。其寢臺に寐た女が遂に變死した。如何だ、驚か

ざるを得ないだらう。」

和「僕はそれに何の關係があるんだか未だ分らないよ。」

緒「君はあの寢臺に何か異常な點を發見なかつたかね。」

和「いや別に。」

緒「仕様がないな。あの寢臺はチャンと床に打ち附けてあるんだよ決して位置を變へることの出来ぬ様になつて居る。あれに寝る人は屹度例の通風穴から吊下る呼鈴紐の垂れて居る下になる様になるんだ。拵えた方ぢや寢ながら紐を引張る便利の爲と云ふだらうが、肝心の紐は鈴に附いて居ないのだから滑稽ぢやないか。」

斯うなると、私も些か思ひ當る所がある。

和「成程。成程。君の見込みが僕にも少しは分つて来た。恐ろしく残忍な又精妙な犯罪だね、而も夫を僕等は妨害しやうとして、居るのだな。」

實際残忍だ。又實際精妙だ。高見澤と云ふ人間は實に恐ろしい深刻な頭脳で對抗しなけりやならぬ。ヒヨツとするど高見澤自身が犠牲にならねばならぬとも限らぬ。愈よこの恐ろしい夜が明けて終ふ迄は、乗るか反るかの大冒険だ。サア和田君もつと此方へ來給へ、悠然と煙草でも喫んで愉快な談話でもしやう。』

そこで私達二人は靜かに種々な話に耽りながら、今か今かと蓮

子嬢の信號を心待ちに待つてゐた。庭樹の間に見えてゐた信武氏の室の燈火も九時頃になつて消えて終つて、邸内は眞暗な裡に葬られた。それから次第々に時間も経つて丁度二時間と云ふものは何事もなく過ぎて、何處かの時計が十一時を打つと殆んど同時に、私達の眞正面の室からバツと微かな燈火が光つた。

『そりや合圖だ。中央の室からだ、蓮子の信號に相違ない。』と緒方氏は飛び上つた。

私達は芹屋旅館の女將に、『今から約束の友人を訪ねるから今夜は歸つて來ない』と體裁よく謝つて旅館を飛び出した。戸外は眞黒暗で、春とは云つても寒い風はゾクゾクと身に沁みる様に覺え

る。此間に微かな燈火を便りにして妖怪變化の巢窟かとも思はれる廢園に乘込む私達は、云ひ知れぬ物凄さを覺え、寒さの故でなく何となく淡い恐怖の爲に身の毛もよだつ様である。

壊れた儘の石垣を踏段として庭園内に乘込むことは何の雜作もないことであつた。繁るが儘に、延びるが儘に打棄てゝ顧みぬ荒れ果てた樹立をぬけ芝生の園を横ざり、高見澤信武郎の微かな燈火を唯一の目標にして、ヒヤ／＼歩いて行くと、薄氣味の悪い夜風はソク／＼と顔を撫で、其氣味の悪い心持と云つたらぬ。遙か向ふの村家の方には兇兆のやうな黄色い燈火が夜風にチラ／＼動いてゐる。

緒方緒太郎氏は元來、恐怖と云ふやうなことを知らぬ様な大膽な人物であるが、流石に今夜だけは何となく底氣味悪い感じに打たれると見えて、凝つと先方を瞞めたまゝ、スタ／＼と歩いて行く。

今少しの所で、芝生の園も横切り樹の間を潜り抜け様とした時に、傍の雜木林の中から恐ろしい不具の小兒のやうなものが飛び出して、跛の足を曳き曳き庭園を横に眞暗な闇へ消えて行つた。

和「ヤツ、あれ、あれ、あれを見給へ。」

緒方氏は、この私の聲に驚いたのか、突然私の手頸を握つた。それから小聲で笑ひながら、私の耳許に唇を當て、

『あれは君、庭番の大猿だよ。』

私は高見澤信武氏が、此の風變りな動物愛好者であると言ふことを、先刻から忘れ果てゝゐたが、今の緒方氏の一言で思ひ出した。大猿は何處ともなく驅け出して行つて終つた。

緒方氏と私は靴を取つて窓へ兩手をかけ内部へ滑り込んだ。緒方氏は静かにその窓の戸を閉め、ランプを卓子の上に載せて、室内隈なく見廻したが、四邊は晝間見た時と何等の變りもない。それと見て緒方氏は私に近づき、唇を私の耳に當てゝ囁く。

『咳一つでも仕様ものなら、すつかり駄目になるぞ。可いか。それに燈火も消して終はなけりや隣室の老爺が覗くからね。』

僅に聞える位に囁いたので、私は

和『諾。』と點頭いた。すると氏は又た

緒『君、決して睡つて終つちやいかんよ。睡つたら生命が危険いぞ。夫れからピストルは何時でも撃てるやうに用意して置いて呉れ給へ。僕は寢臺に座るから、君はその椅子に腰を掛けて居たまへ。と囁いた。

私はピストルを取出して自分の傍に置き、緒方氏は寢臺に座つて、持つて來た細長いステッキを傍に置いて、マツチと蠟燭とを手を持つたまゝ、ランプの心を引込めて、フツと吹き消して終つた。後は鼻を撮まれても見當のつかぬ眞暗闇となつた。

あゝ、何と云ふ氣味悪さと怖ろしさであらう。夜は次第々々に深々と更けて、四邊は物の音も絶え、隣室に居る人の微かな鼻の聲さへも聞えぬ眞暗闇である。加之草木も睡り水の流れも止まると云はれる眞夜半に、唯一人の連れの緒方氏がつい其處の寢臺の上には横つてゐるとは云ふものゝ、それさへも私の眼には見分ける事も出来ぬ。況して聲の立てられやう筈もなく、眼を睜り、呼吸を窒めて心中に唯、さう思つて居るばかりである。而も時々物凄いやうな聲を出して夜禽の聲や、猫のやうな豹の鳴聲が聞えるばかりである。私は薄氣味悪るさに身内がゾク／＼として、心中には不快な怖ろしいことばかりを考へて居た。

何處かの大時計が十五分毎に時刻を報知のが聞えて来る。其十五分の間の待ち遠しさは一通りでない。それが積り積つて十二時一時、二時と進み、やがて三時を報たと思つた一刹那である。忽然、一條の火光が通風穴を洩れて、ハツと思ふ間に又た倏忽として消え去つた。すると今度は油の燃えるやうな臭氣が鼻を突いて襲つて來た。驚破こそ隣室で龕燈に燈火を點けたに相違ないと思つてゐると、コソリ、コソリと何處ともなく微かな音がする。耳を濟ますと、何うも人が動き廻るらしい氣配である。それも間もなく止んで、其後の半時間ばかりといふものは、唯油の燃える臭氣が洩れて來る、確かに隣りの室から出るに違ひない。夫れでも

緒方氏は身動き一つもしない。四邊は又もや以前の寂靜に復歸つて、幾ら耳を引立て、何か物音をでも聞きつけやうと鋭くなつた神經を惹立て、更に何等の物音も聞えない。サア斯うなるど人間は不思議なもので、心は益々焦れに焦れて來る。緒方氏は何うしたのか、何處かへ行つたのか！ 否や行く氣遣いはない。矢張り寢て居るに違ひない。

此瞬間であつた。奇なるかな、怪なるかな。今度は突然藥罐の口から湯氣の洩れ出るやうな變な音が聞え出した。夫と殆んど同時に緒方氏は跳るやうに寢臺の上に刎ね起きてマツチを擦つた。ど、思ふど、傍に置いたステッキを取るより早く狂人のやうに、

呼鈴の紐をビシリと續け様に打ち出した。

九、見よく悲痛極まる苦悶の叫喚

……ヤア斑の紐だ！ 早く〜ピストルを

緒方緒太郎氏は何に驚愕したのか、寢臺の上に跳ね起るより早く、傍のステッキを取上げて、呼鈴の紐をビシリビシリと打ちながら

「アレ、アレ。和田君。あれを見たか。」と喚きながら、狂人のやうに繰り返すのであつた。

私は緒方氏がマツチを擦つた時、確かに口笛の音を聞いたが、

突然の火光で眼がパツとしただけで、何物をも見ることは出来なかつた。唯、死人のやうに蒼醒めて恐怖の極に達した緒方氏の顔を見たばかり、氏が何をあんなに手荒く打つたのか、薩張分らなかつた。

緒方緒太郎氏が紐を亂打して、そのステッキを側に置き、通風穴を見上げる迄は、僅かに一分以内の瞬間であつたが、其間に隣室から實に突然に、私が生れてからまだ一度も聞いた事のない悲痛極まる苦悶の叫喚が、深夜の寂寞を破つて、絹を裂くが如くに起つた。其聲は一刻一刻と高くなり、哮るが如く咆えるが如く、憤怒の喚びと、恐怖の悲鳴と、苦痛の唸りと相次で起り、正に是

れ焦熱地獄の阿鼻叫喚とも譬へるやうな、一種何とも名状の出来ぬ物凄さであつた。私も緒方氏も満身水を浴びたやうに打ち震へて、耳を蔽ふて相互に顔を見合せたまゝ何と云ひ出す語もない。程なく、最後の叫喚と覺しき特に高い悲痛の一聲の反響が、深夜の更け静つた寂寥の裡に消え去つた時に、私はホツと溜息を吐いて、思はず知らず、

和「こりや何事だろう。」と喘ぐがやうに聲を出した。緒方氏も私の此聲に漸く吾に復つたやうにランプに燈を點けた。見ると顔は蒼ざめて、眼は異様に光つて居る。真に恐ろしい瞬間であつた。果して隣室には何事が起つたであらうか。私の心臓は非常の速さ

で動悸を打つて居る。手と足は止め度もなく、ワク／＼と震へて居る。

緒「あゝ、これで漸つと事件は終つた。大抵は巧く遂行たやうだが、和田君ピストルだけは念の爲に準備して呉れ給へ。サア隣室へ乗込ひのだ。」

緒方氏は斯う云つて手にランプを提げ、廊下に出て高見澤信武氏の室を二度三度と打ち叩いたが、何の返應もないので、把手を廻はして戸を開け内部へ入つた。私はいざと云はゞ打つ放す様にピストルを身構へて、ソツと緒方氏の背後に従つた。

あゝ何たる凄惨悲痛の光景であらう。卓子の上には電燈が、半

分程口の開いた金庫を照し、其傍の椅子の上には高見澤信武が長い寢衣のまゝ打倒れて、膝には晝間私達が見た犬鞭が置いてある。彼は頭を仰向けに背伸をして、釣り上がった双眼は恨めしさうに、形相恐ろしく天井の片隅を睨めて、見るも身の毛のよだつ様に倒れて居る。鬼氣人を襲ふとは必ず斯んな場合を云ふのであらうと思はれたが、併しそれよりも更に更に奇怪千萬なるは、其額が黄色い紐で嚴敷く巻かれて居ることである。

私達が入つて行つても高見澤信武は聲をも立てず、身動きもせず、唯凝つと天井の片隅を睨めて居るばかりである。

緒方緒太郎氏は

「『ヤア斑の紐だ。斑の紐だ。和田君、早く、早く、そのピストルを。』と叫ぶ。

私が恐る恐る、更に一步を踏み出した時、彼の高見澤信武氏の鉢巻は自然と動くやうに見えたのも一瞬時、忽ち毛髪の間からは菱形の頭を擡げてニヨロ／＼と鎌首を延ばしたのは、紛れもない一匹の蛇であつた。

「『ヤア大變、大變。こりやあ確かに南洋産の毒蛇だ。』

緒方氏は再び斯ふ叫んだ。

「緒方君、危険だ、危険だ、近寄つちやいけん。信武は噛まれてから十分と経たないのに早往生した。餘程劇烈な毒蛇だ。人を

呪はゞ穴二つとは能く云つたものだ。人を陥れる爲に掘つた窠に自分が落ちて死んだのだ、兎に角早く此物騒な動物を自分の巢に返さなくちや不可ぬ。さうして蓮子を早く何處かへ避けてせてから、警察へ訴へて出るのだね。」

緒方緒太郎氏は早速、彼れ信武の膝の上から犬鞭を取上げて、鞭の先端の穿に蛇の首を引つ懸け、力任せに信武の頭に固く巻附いてゐる蛇を引離し、充分手を伸ばして蛇を引寄せ金庫の裡へ投込み手早くガタリと扉を閉めて終つた。

最早、高見澤信武の死状も明かになり其原因となる可き蛇も金庫の内部に納められて終つたから、今迄斯くも長々と物語つて來

た顛末に蛇足を添へる必要もないのであるが、此恐る可き出来事に恐怖へた蓮子に右の仔細を傳へた時の光景。彼女を私達二人で保護して隣村の伯母の許へと送り届けた事や、次で餘り明敏ならぬ警察官は高見澤信武の死の原因をば、彼が愛撫してゐた南洋産の斑の蛇を餘り粗雑に取り扱つた結果だと断定した等の滑稽な談もあるが、其等は別段委しく述べる必要もあるまい。

唯、其翌日私達が、蓮子に別れを告げ、東京へ歸る瀛車中で緒方氏が私に説明した此事件に就ての結論だけは、省くことが出来ぬから、茲で語る必要がある。

一〇、鋭敏なる探偵徑路の説明

……怪屋の怪事件は終りを告げた

緒方緒太郎氏は語り出す。

「和田君、僕は今回の事件で益々僕の所信を確實にした事があるね、證據の充分に擧がつて居ない探偵ほど危険なものはないと云ふ事をさ。僕は初め乞食の居ると云ふ事や『斑の紐』と叫んだ姉の語など、それに死ぬ時にマッチを持つてゐたといふ事とを綜合して考へた時には實際僕も、何物かと姉を威嚇したんだらうと思ひ込んだ。併し僕が彼の家を検査して、窓からは如何しても危

害を加へることが出来ぬと悟つた時に、僕は今迄の見解に執着せず、早速他の原因を捜しにかゝつた。其點だけは僕の頭腦に對して賞讃して貰つても宜いと思ふね。』

『それから、あの室内で通風穴と其の上から取附けられた紐とに僕は直ぐに注意をした。其次には移動の出来ぬやうに一定の場所に打着けてある寢臺を見た時に、ア、これは此の通風穴から忍ばして何物かを此の紐を傳はらして此方の寢臺に送る計劃だなど想像することが出来た。すると直様『蛇』と云ふことが胸に浮んだ。猶ほ信武氏が南洋産の動物を可愛がつてワザ／＼南洋から取り寄せたと云ふ事を思ひ出して僕の想像の確實であることが決つ

たんだ。醫師が検査しても知れぬと云ふのも無理はない。あんな蛇の齒の跡が容易に知れるものぢやない。他人に分らず、而も僅に數分間に立ち所に其効力の顯はれる毒殺法を考へ出したのは流石に専門の智識のある彼の行爲として感服の他はない。而してあんな巧妙な仕掛は餘程機敏な警察官でなければ發見し得るものぢやない。それに例の口笛だ。兎に角次の室に蛇を忍び込ませても其目的を達しないとなる。夜の明けないうちに自分の室へ蛇を呼び戻す必要がある。つまり信武先生はあの口笛で呼び戻す事に蛇を馴らしたものに違ひない。あの金庫の上の牛乳は口笛によつて蛇が歸つた時呑ましたものに違ひない。』

「緒」僕は高見澤信武の室へ入らない前から大抵は想像してゐたが、愈々あの室へ入つて椅子を検査し、椅子の上に始終人の立上つた跡のあるのを見て、通風穴に届くには如何しても左様しなければならぬ筈だと思つた。それから金庫や牛乳の器物、先端の穿になつた紐附の犬鞭などを見た時に僕は最う何等の疑ひを挟む餘地も無いまでに「蛇だ」といふ事を推定した。あの金庫の響のしたといふのは、老爺さん彼の危険極まる毒蛇を金庫に納めて慌て、蓋を閉める時に發した音に違ひないと思つた。」

「緒」何？何だつて、夫れなら何故僕があゝの闇黒で紐をステツキで打つたと云ふのか、ア、君には知れなかつたのかなア。僕はあの

時蛇のシユウ、シユウと云ふ鳴聲を聞いて、扱ては愈々蛇が僕の寢て居る寢臺を襲ひに来るなど思つたからさ。老爺さん僕等が彼の室に居るとは知らず、全く蓮子嬢が寢て居るとばかり思ひ込んで、愈々今夜こそは殺して仕舞ふと、蛇をよこしたに違ひないのや。」

「和」成程。緒方君それで悉皆分つた。あのシユツ／＼と言つたのは、僕は薬罐の口から湯が煮え立つ音かと思つて居た。併し蛇は如何して元の室へ歸つたらう。」

「緒」そりや君。僕が紐を打つたので毒蛇先生驚いて、今まで馴された通り紐を渡つて自分の室へ歸り、其所に居合せた信武氏を日

も感服するの他はない。

思ふに高見澤氏は、隣室でマツチの音がすると同時に、ステッキで紐を打つた音を異様に思ひ、立ち上がった瞬間に毒蛇が歸つたけれども、私達の室の物音に氣を奪はれ、毒蛇の首に紐輪を掛けることが手遅れた爲に、あの様な無惨な事になつたのであらう。返へすくも悪い事は出来ぬものである。

これで此の話は先づ終りを告げたから、引き続き「穴中の惨死體」といふ非常に面白いのを一つ御まけに諸君にお話したいから次に掲げることとする。

穴中の惨死體

一、人と自働車の行衛不明

……乗つた筈の一人は三階に居る

「和田君、また少々毛色の變つた事件が突發したぜ。」緒方理學士は今しがた憂色を帯びた一老紳士を玄關まで送り出したあとで、私の室を覗き込んで慙う云つた。

「暇なら此方へ來たまへ、今の老人が持込んで來た奇怪なる自働車紛失事件の顛末をお話するから。」

私は直ぐ立上つて緒方氏の室へ行つた。而して相並んで煙草を
 燻らしながら長椅子に腰を卸した。之は玻璃戸越しに午後の日光
 が麗らかに射してゐる冷たい二月の朝のことである。

『今日は月曜日だな、エ、ト、事件の發端は金曜日だから、まだ
 二日三日しきや經たぬ。』

緒方氏は例の炯々たる眼で凝乎と私の顔を見入りながら、

『その金曜日の薄暮、安藤と云ふ山崎銀行の重役が銀行の退けた
 あとで、日下と云ふ友人を誘つて自動車で遊びに出掛けたのだ。
 寒い晩で、空ツ風がヒューヒュー吹いてゐたから、二人はしづく
 り襟毛のオバアコオトに身を包み、塵除眼鏡を掛けてゐた。』

『兩人は諸方を遊び廻つた後、四谷へ出て、カツフエ、ヨツヤの
 三階へ上つた、さうして晚餐をやつた。九時を打つと安藤氏は階
 下へ下りて來た、勘定を拂つて、更に前に乗り棄てて置いた自動
 車の燈火の手入れをし、故障の有無を調べたりしてゐた。その間
 同伴の日下氏は三階でひとりポルト酒を飲んでゐたが、五分程す
 ると、これもノコノコ階下へ下りて來た。臘虎帽を眉深にかぶり
 外套の襟深く埋れた彼は、蹠いて來た給仕女に五拾錢銀貨を呉れ
 て、すでに運轉手臺に座つてゐる安藤氏の傍に座を占めた。安藤
 氏は素人ながら自動車の操縦は極めて得意である。把手を動かす
 と車は安藤氏の住宅なる角筈の方向指して疾走した。カツフエ、

ヨツヤの主事千田氏及び二三の給仕女はその姿が見えなくなるまで見送つたのであつた。』

『併し疾走して闇中に紛れ入つた車は、乗客と共に、それ以來杳として消息を失つてしまつた。』

緒方氏はここで口を切つて一しきり煙草の烟を強く吹き、

『併し勿論その失踪云々は後になつて知れたのだ。その際、兩人が去つた直ぐ後に起つた怪事と云ふのは、先づかうだ。兩人が出掛けてから三十分ほどして、お千代と云ふやはり給仕女が三階の其室を掃除に行つた、すると驚くべし、日頃見知合の日下氏——先刻まさしく安藤重役と自動車に同乗して立去つた筈の日下氏が

チャンと其處に、安樂椅子に居汚なく寝ころんで居るのでは無いか！』

『不思議！不思議！と云ふので、思はず肩に手を掛けて揺り起すと、日下氏は寢惚眼をポツかり睜つたが、一切の事情は頓と御承知無い。たゞポルト酒を注文して一口傾けてから、たツた今揺り起されるまで、何故か前後生體なく寢込んでしまつたとのこと、此室は勿論、現在掛けてゐる椅子から一寸でも動いた覺えは無いと云ふので、當人も甚く大狼敗の體であつた。』

『あまり不可思議な、夢のやうな事件なので、取り敢ず安藤氏の宅へ電話で問合せると未だお歸りは無いと云ふ、勿論其後一時間

経つても二時間経つてもカツフェへは何の音沙汰もない。翌朝になつて愈々自働車が安藤氏と他の何者かを乗せた儘行衛不明になつたと云ふ事實が明らかになつたのだ。」

『事實はザツとこれだけだ。』

と、緒方氏は語り除けて、

『サテ和田君、君は此事件を如何見るね？』

と、例の狡さうな眼つきで私を見る。

和『先づ何か悪戯でも有りやしないかと思はれるが』

緒『さう、だが僕が夫から知り得た事項が、まだ他に一つ二つある。その一つを云へば、安藤氏は其夜別に他から訪問を受ける約

束を持つて居なかつた筈だ。然るに其夜の十一時過ぎに、馬場某と云ふ男が安藤の家へ訪ねて来て、主人がまだ歸宅せぬと云ふのを聞いてひどく落膽した體で歸つて行つたさうだ。そして其男は餘程主人に急ぎの用件が有つたらしく思はれる、何故と云ふに、是非面會したいと言ふので、殆んど十二時近くまで待つてゐて、漸々立去つたとの事だからだ。』

和『ハ、ア、して見ると、誰だか知れぬが、茲に或る一個の人物が在つて、その晩、どうかして安藤氏と、今の話のその馬場某とやらの面會を避けようとし、其必要から何か危険な策を弄したのぢや無いだらうか？』

二、給仕の女は探偵の端緒

……煙草の火を點けさせた男は誰？

緒方理學士はヤオラ身を椅子の上に引起して、

「兎に角僕の鑑定によると、茲に一個の怪しの人物——假に其名をXと呼んで置かう。——そのXなる人物が在つて、金曜日の夜安藤氏と日下氏が共に自動車で遊びに出ること、而してカッフエヨツヤで晚餐を認めることを、前以て知つて居たに違ひない。さうして恐らく假裝してカッフエへ入り込み、安藤氏と日下氏とを引離す機會を待受けて居たらしく思はれる。で、その機會と云ふ

のは、日下氏が給仕女にポルト酒の洋杯を命じた時なのだ。日下氏はその夜出がけに寒さ凌ぎに只一杯ポルト酒を命じただけであつた。この機會を利用し、Xは何等か巧妙な手段により、恐るべき魔酔劑を日下氏の洋杯に投入したのだ。」

「安藤氏がそれと氣付かず自動車の手入れに階下へ下りて行つた時には、日下氏は既に昏酔状態に陥つてゐた。而して曲者Xは又此の安藤氏の不在の五分間を利用し、階上に紛れ登つて、日下氏の臘虎帽と、オバアコートと塵除眼鏡とを壁の上から奪ひ取り全然日下氏に化け込み、其儘澄まして安藤氏と同乗してしまつたのだ。つまり當夜の犠牲を安全に擒にした譯だ。」

「闇夜ではあるし、安藤は自働車の煌々とした燈火に眼眩んでゐる、加之に給仕女どもの話によると曲者は背丈恰好とも日下氏によく似てゐたと云ふから、酔つて居た安藤氏に識別けられる筈が無い。そこで其儘出發してしまつた、——それから以後は漫然僕の理論を進めて行くのは危険だ。實地に探査した上で無ければ何とも云はれない。」

「兎に角究極の解決は角筈附近五六里以内の處に在ると僕には思はれる。どうだ、和田君、差當り仕事が無ければ、之れから一緒に探偵に出掛けて見ないか？」

私等は間もなく四谷見附で電車を下りた。緒方氏は早速カッブ

エ、ヨツヤの主任に面會を求め、其夜日下氏の處へポルト酒を持って行つたと云ふ、お千代と云ふ給仕女を呼んで貰つた。ぼつちや、りした愛くるしい、鳩のやうな女である。緒方氏はニコ／＼しながら質問する。

緒「イヤ御忙しいところを御氣の毒だね、そこで君が日下さんの處へポルト酒を持って行つた時の事を、すつかり精密に話して貰ひたいのだが。」

千「ハイ、私は御注文を伺ひますと、直ぐ酒場へまゐり酒場の當番の女にポルト酒を注いでもらひ、それを御盆の上に載せて三階へ持つて参つたのでござります。」

「緒」で、君が酒場へ注文を通じた時、誰かそこらに居た客でそれを聞いた人があつたらうか？」

「千」それはお聞きになつた方が、有るかも知れません。」

「緒」フム、だが誰も日下氏の姿を見た人は有るまいね。」

「千」ハイ、たゞポルト酒を持つて来い。」と仰有つた御聲が聴えたばかり、日下さんは恰度夕刊をどりに二階まで下りて被來つて、その階段の上から妾を見て御注文になりましたのです。」

「フム、して見ると、姿は見えずに聲だけが聞えたのだね。」

「緒」方理學士は大きく首肯さ、私を顧みて、

「和田君、こりやあ大切な着眼點だぜ。よく記憶へて置いて呉れ

たまへ。トコロでお千代さん、もう一つ聞きたい事が有るのだ。それは、なにか、君はそのポルト酒の洋杯を直様日下氏の所へ持つて行つたのか、一寸でも寄り道をしやしなかつたか、よく考へて見て呉れないか。」

「千」ハイ左様仰有られますと、どうやら上りしなに一寸其杯を卓子の端に置いたやうな氣がします。さうです、さうです酒場の御客さんが一寸煙草に火を點けて呉れると仰有つたからでした。」

「緒」ナニ煙草の火だど、フム、で君はそれを頼んだ男の顔を見覚えてゐるか？」

「千」イエ、取急いで居りましたし、その卓子の周邊には他の御客

様たちが澤山混雑してゐましたから、何が何やら頓と覺えが有りませぬ。』

緒「イヤ、それで分つた、忙がしいところを、迷惑掛けて濟まなかつた。』

私等は此の家を出ると直様、辻待ちの自動車を呼んで角筈の方面へ走つた。

三、沼池の中の怪しき圍る

……腰まである水中にザブ／＼入つて行つた

四谷の大通りを眞直、に車は新宿の踏切を越えて角筈に入つた

が、緒方氏は駐めよとも命じない。折々ポケットから何やら手帖を取出して、頁を繰つては頻りに四邊と見較べて居る。その間に自動車は青梅街道を驀然に、次第に寂しい田舎道を進んだ。

『馬曳村』と云ふ札が路傍の電柱に打つてある。と、突然、緒方氏は運轉手に聲を掛けて、ピタリ車を駐めさせた。而して驀然と地上に飛下りながら、私を顧みて、

『サ、和田君、これからは徒歩で尋ねて行かなくちやならん。安藤氏所有の自動車一二〇八號が金曜日の夜、此村の入口まで来たことは昨日までに派出所、駐在所、役場其他の手で檢べられて、先づ明らかになつてゐる。併しこれから如何行つたかは全然知れ

て居ない、僕等は先づ大凡の見當に随つて例の推理を進めて行かねばならぬ。」

私等兩人は自働車を返して、左右に蕭條たる冬野を眺めながら約一里半ほど埃立つ街道を徒歩して行つた。もう人家は疎になつて曇つた空に冷たい風が吹いて居る。右にでも、左にでも畠へ通ずる小徑が有ると、緒方氏はキット立止まつて、その上に鋭どい視線を投げた。

「畠の中に人の居ない穀倉見たいなものでもあると、詮議の種になるがなア……」

と緒方氏は、折々呟いた。

やがて街道の右手に小流れが在つて、それに續いて小さな池のやうなものが見えた。馬洗ひ場と見えて、其周辺の赤土の上に轍の跡が縦横に印いてゐる。だが、透して見たところ、自働車の輪の痕らしいものは少しも見えぬ。併し緒方氏は停止つて、暫時この池を凝視してゐた。而して聴ての事に、

「ソロ／＼見當が付き出したぞ。」

と獨語した。そして私の方を向いて、

「和田君、どうだ、一つ僕の推理に交際つて呉れないか、まかり間違つた處で、少々時間を損する丈のことだ。かうと先づ僕がそのXなる人物だつたとして、自働車へ乗つた儘、此街道を横に

外れやうとすれば、先づ今迄の處でこの地點を選ぶね。こちら側から行けばすつかり砂礫が敷いてあつて今通つたばかりの痕でも軽く残るぐらゐなものだし、池を越せば向ふはあの通り茫々とした枯野だ。一晩夜露が下りるか、または一雨さつと降れば自働車の輪の泥痕でも何でも綺麗に濯はれてしまふ。自働車の行衛を晦ますには持つて來いの場處だ。ただ問題はこの池が自働車で越せる程浅いか如何かと云ふ事だが——これを一つ踏査して見よう。」

和「だが安藤氏がまだ生きて乗つて居るぢや無いか、安藤氏が自分ですんなことをやるかね？」

緒「さうサ、安藤氏は生きて居た、が、それはカツフエ、ヨツヤ

を出た時の話だ、此處へ來るまでには、僕の鑑定を以てすれば、安藤氏はすでに殺されたか、又は少くとも抵抗する能力を失つて居たのだ、而して他の人間が把手を握つて居たのだ。」

と、説明した儘、緒方氏はサツサと歩み寄り、靜かに池の中へ踏み込んだ。次第に歩を進めると、最も深い處で水は膝ぐらゐ迄しか達しない。

緒「どうだい、目算通りだ。君もやつて來たまへ。」

緒方理學士は快活に呼ぶので、私も入つて行つた。

兩人が池を渡ると、前面の枯野は遙か遠くまで緩い傾斜を示した。而して其傾斜はやがて向ふ一帶のひよろ高い雑木林の丘陵に

續いてゐる。私は緒方理學士と並んで枯野の中をダラ／＼下つて行つたが、突然足下の枯草のうちに黒い油の染みを發見けた。

「ヤツ、これは給油機の油だ！」

と叫ぶと、緒方氏も急いで眼を向けた。篤と注視すれば一點、二點、連々として枯草の間に重油の滴りが落ちて居る。自動車は遙かにこの枯野の傾斜面を徐行しながら進んで行つた——と云ふことが是で分明る。

勢込んで更に丘陵を越えようと、私等の眼の前に再び無数の水溜りが顯れた。此處等はずんど盛に砂礫を掘り出した跡と見えて、今迄の枯野の風情とは異つて、赤い地肌が諸方に露出し、水が流れ

て一面混然した沼池のやうになつて居る。丘陵を殆ど一直線に下つたところの、一番大きな水溜りの中に、何やら木材で圍つた井戸の様なものが見えた。其處此處と眺め廻してゐた緒方氏は凝乎どこの圍るに眼を着けたが、直ぐ件の沼池へ躍り込み、腰まである水中にザブ／＼入つた。此の寒空に水中に立つ緒方氏の勇氣に私は驚いた。やがて緒方氏はその木材を動かし始めた。臂力のある緒方理學士が二三度力を籠めて動かすと、木材はやがてグラ／＼揺れ出した。すると腐れ切つた蓋と覺しいもの、門が、ポツクリ取れた、其途端に緒方氏は危く水中に尻餅を搗き損つたが、辛うじて踏み止まつて、更に一枚の厚板を引剝した、と同時に内部を

覗いて異様な叫び聲を立てた。
『ヤ、ヤ、在る、在る、確かに自動車一臺を抛込むだけの餘地がある！』

四、大穴の中には自動車と人が

……粉微塵になつて、落ちて居た

私が急いで馳けよると、緒方氏は、更に、

『どうだ、この物凄い大穴を、この左右に羊齒の繁つてゐるのを見たまへ。これは以前砂礫を掘り出したか、さも無ければ何かの石を發掘した跡だらう。石を最早出し盡したので、今はこの通り

廢物になつて、小供でも落ちぬやうにと蓋がして在るのだ。だがヤ、ヤ、ヤ、こりや什麼だ！大凡の推理が愈々確實になつて來たぞ！これ、これを見たまへ！』
と云ひながら氏は今引剝した一枚の厚板の裏を示した。見ると其處に出た鏽釘の先端に、五厘錢大の鼠色の洋服の衣片が引掛つてゐる。

緒「こりやあ確かにXが此板をねち取つた時、鍵裂きしたものに違ひ無い。後日重大な證據物件になる。なほ和田君、この内側をよく見たまへ。』

と、氏は覗き込んで指さしながら、

「それ、右側に生へた羊齒が五六本新らしく折れた痕が有るだらう、これは慥かに或る物體がこの穴へ落される際に、傷けたものに相違ない。」

如何にも羊齒の莖が生々しく折れてゐるのが見える。直徑二間も有らうかと云ふ大きな堅穴で、底は闇黒で何處まで有るか別らない。腥い、いやに暖かい風が底から吹いて来るやうな氣がして私は思はず顔を外向けた。

緒「サ、これで一まづ僕等は後戻りをして、繩と人足を用意して來なけりやならぬが、兎に角これの仕末だけは付けて置かう。」
と緒方氏は吐きながら衣匣からビンセットを取出し、件の洋服

の衣片を摘み取つて小箱に収めた。そして再び厚板で堅穴の蓋をして、

『では出来るだけ急いで引揚道具を車へ乗せて引張つて來ることにしやう。勿論急いだところで、迎も安藤氏の生命を取り止めるど云ふ希望は無いが………。』

私等は再び枯野を越して以前の街道に出た。人家の在る處を探して、漸く一臺の荷車と、屈強な人足三名と、太い麻繩を整へて來た。

緒方氏は上衣を抜き棄て、輕快な服装となり、麻繩の端を緊乎胴のまはりに括りつけた。而して人足に命じ自分の上衣のオバア

コートを重ねて、穴の口の木材に結び付けさせた。これは繩をズル／＼下して行くにあたり、その摩損れない用心である。やがて右手に用意の懐中電燈を照らして、緒方理學士は人足の引下す麻繩と共に、闇々たる深穴の中に下りて行つた。人足は顔を見合せながら、恐る恐る繩を出してゐる。誰もこの穴がどれ程深いかを知らぬらしい――。

併し穴は思つたよりも深かつた。三間、四間、繩はズル／＼容易に延びて行つた。併し十間ほど手繰り出すと、それはハタと止まつて、緒方氏が漸く穴の底に達したと云ふことが分つた。同じ時に緒方理學士の吐鳴る聲が底から幽かに聞えて來た。行動を自

由にするため、最少し繩を下せと云ふのである。

私は吻として、人足と協力して居た繩から手を放し、穴の口に近寄つて、中を覗き込んだ。見える、見える、闇々たる怪穴の底に、緒方理學士の持つた懐中電燈の火光が、一點螢の如く見えてゐる。やがて五分程経つと、底から『引上げる』と云ふ合圖が在つた。人足どもは協力して繩を引上げた、下ろす時より重いこと夥しい。まア何といふ重さだらう。折から繩がメリ／＼といふ、私は切れねば宜いがと、ひやく／＼しながら共に繩を引上げた。

斯くて緒方理學士は泥塗れになつて穴から上つて來た。が、何にも持つて來ない。蒼白めた顔で沈黙したまま一言も發しない。

ただ一同を伴れて以前の街道の口まで出ると、人足共に賃銀を拂ひ一通の手紙を手早く認めて村の駐在所に届けるやうに頼んで、其儘街道を東京の方へと歩み初めた。

「君、これは思つたより、頗る戦慄すべき事件だよ。」

緒方氏は始めて口を切つて、

「まさしく安藤氏はあの底に居たよ、自動車の輪の下に見るも無惨に壓碎されて居た。所が夫ればかりぢや無い。左の脇腹から心臟へ掛けて、拳銃で見事に射通されてゐる。察する所、Xなる疑問の兇漢は、彼の傍に座を占めた儘、ブツ放したものに違ひない。」

「兇漢は餘程細心な注意を以てこの犯罪を行つたらしく思はれる

安藤氏の邸近く来るまで曲者は自動車の把手を安藤氏に任せてゐたが、突然寂しい處を見計つて、一發に射止めてしまつた。と同時に今度は自ら安藤氏の座に直り闇に紛れ青梅街道を驀然に走り出したのだ。曲者は前以て、この場所と、また例の沼の深さも測知してゐたのに違ひない。で、やがて街道を横に外れあの沼を走り越え、自動車を側の枯野の傾斜の處——今黒い油の跡を君が発見した處——に止めて置いて、あの穴の蓋を除りに行つたものと思はれる。自動車の燈火は既に街道を外れる時に消してしまつてある。曲者はブレエキを掛けて一寸車を其處に駐めたのだ。やがて、ブレエキを緩めると、自動車は自然と徐行しながら丘

陵を下つて行つて、安藤氏の死體を載せたまゝ、眞直に穴の中に
陥込んでしまつた。

幸運矣と曲者はその後で、自分が身に着けてゐた日下氏のオバ
アコートと獵虎帽と、塵除眼鏡とを、同じく穴の中へ投込んでし
まつた。穴の兩側に生へた羊齒の葉が折れて居るのは、慥かにこ
れらの品を抛込んだ時に折れたものゝやうに想はれる。何故と云
ふに、自働車の方は實に巧妙に落下したらしく、少しも四邊に觸
れた形跡が無いからだ。

夫れから、曲者は何でも犯跡の残りさうな物は一切この穴の中
へ投込んで始末をつけて終つたのだ。

五、鍵裂きのある洋服を着た男

……夫れが必ず此の殺人の大罪人だ！

例によつて精細なる緒方理學士の説明を聞きながら、私は街道
を歩いて行つたが、學士の言葉が途斷れると、私はその顔を見上
げて、

『併し、また最後の大問題が残つて居るぢやないか、一體君はそ
のXなる人物を何者だと鑑定するのだね？　そこまでは未だ確と
した目的は附かんだらうね。』

緒「どころが大違ひだ。」と緒方學士は微笑して、

「僕は遅くとも茲四五時間を出でずして、犯人は捕縛し得る積りで居るよ。」

と答へ、平常の呑氣な調子で、

「第一にこの犯人は日下氏と相識の間柄の者だと云ふことが分つて居る。それは彼がカツフエ、ヨツヤで日下氏の姿を見ずに、只其聲を聞いただけで、注文のポルト酒が日下氏の飲料だと云ふことを知つたからだ。これは其人を餘程善く知つて居る人で無ければ出来ぬ筈だ。」

また彼は安藤氏の行動をもよく辨へてゐる男だ。而して、彼が山崎銀行の人々の常に來るカツフエ、ヨツヤの給仕女たちに顔を

見知られて居ないで、而も安藤氏及び日下氏を知つてゐる處を見ると、何か銀行以外に在つて二人に關係を有して居る者に違いない。而して馬曳村附近の地理、殊にあの砂礫場の様子までも、飽くまで委しく知つてゐる處を見ると、どうも角筈以西の郊外に住んで居る者らしく思はれる。どうだ、君、この判断は？」

と云つて、更に言葉を改め、

「この判断で推して行くと、その犯人の人物は、かう云ふ事に歸着する。」

「即ち、角筈以西の郊外に住居して居る人物で、身丈恰好は日下氏に酷似て、その袖に縫裂の在る洋服を着た、加之に自動車操

縦が出来、また多少藥物の知識を持つた男である。さうして又、其男は其夜安藤氏と、例の安藤氏の不在宅を尋ねたと云ふ馬場と云ふ男との面會を障げることに非常な必要を感じて居るのである所で、併し和田君、よくこの邊を考へて見たまへ。日下氏の換玉となつて、九時五分にカッフエ、ヨツヤを自働車で出た人物は、九時二十五分には既に安藤氏の死骸を載せて例の穴の口に達してゐたのだ。ソコで自働車や、死體の仕末をつける時間を三十分として見たまへ。ソレデ未だ十時にはなつて居ない。それから少し急げば十一時までには一里半は樂に角筈に達することが出来る。さうすれば、今殺した許りの男の不在宅へノコ／＼出掛けて行つ

て、態と三十分以上も待ち、憊れた顔をして歸ることも出来やうぢやないか？」
 『僕はその馬場と云ふ男の名刺を、安藤氏の家から貰つて在るか、これからその家を訪ねて行かうと思ふのだ。』
 と云ふ緒方氏の説に随つて、私等はやがて人家の立籠めた町へ出た。そこで二輛の辻車を雇つて、柏木停車場方面へ急がせた。餘り大きな家では無いが、邸内に樹立の多い邸で、門に『馬場勝重』と古びた表札が懸つてゐる。
 電鈴を押して面會を求めると、主人はいま他出する處だとの事であつたが、取敢ずその書齋に通された。

緒方氏は案内されて廊下を傳ひながら、私の耳もとに、微聲で『また一立廻りしなけりや成るまいぜ。』と囁いた。

六、兇漢馬場勝重の就縛

……酸悲を極めた大穴中の死體

座蒲團の上に兩人が座を占めて待つて居ると、やがて、葉巻を片手に持つて、四十五六の頬髯の青い、眼付の鋭どい男が出て来た。いかにも出掛けと見えて、洋服姿である。

緒方氏は一禮して、直ぐ

『失禮ですが、あなたが馬場勝重さんで御座いますか？』

と訊ねた。其の男は、

『ハイ、して君は？』

と緒方氏の頭から足下までジロく見おろしながら問返す。緒方氏はこれにジロリ冷たい視線を浴せたが、直ぐ立上つてツカくと歩み寄り、男の肩を軽く叩いて、

『馬場君、僕は最う少し君は聰慧な男かと思つたよ。今日この上衣を着るのは、少し思慮が無さ過ぎようぜ。』と云つた。

馬場はギョツして、聲高く、

『なんだ、失敬な、君は狂人か、一體何者だ！』

と掴み掛らうとする。緒方氏は肩に置いた手を放さず、
 『僕か、云つて聞かさうか、僕は今安藤氏の死骸と、自動車を見つけて来た者だ。』

と云ひ放つと、同時に悪鬼羅刹の如く變じた馬場の物凄しい形相を睥睨しながら、

『和田君、此奴の兩腕を引捉へて呉れたまへ。』
 と叫んだ。

俄然、大の男三人の大格闘が始つた。馬場の家人共は何事ならんと駈付けたが、私等の勢に懼れてか、誰も室へ入つて来ない。一人の女中は最寄の交番へ走つて行つた。これで警官が出張して

来れば、私等の方では此上の好都合は無いのである。併し格闘は瞬間にして鎮まつた。世にも無惨なる殺人罪を犯した兇漢馬場は我等兩人の腕力で、其場に引据えられてしまつた。

緒方氏は静かに馬場の洋服の袖を検べた上、私を顧みて、

『和田君、見たまへ、この鼠色の洋服を、紛ひもないコレ此の通り鍵裂きの跡がある。』

而して、更に、

『どれ、どんな事情で、この男が斯様な恐るべき犯罪を行つたか一つ調べて見るかな。』

と云ひながら、傍の手紙挿みを引繰り返して種々探つて居たが、

やがて一封の書状を私の眼の前に示して、
『フム、矢張り僕の想像通りだった。これを読んで見たまへ。明
らかに安藤重役の筆蹟だ。』

私は書面を取上げて緒方學士が指した處に眼をやるど、
當行より御用立の金額全部御契約に従ひ今夜十一時限り拙宅へ
御持參無き時に於ては、明朝は猶豫なく、兼て申上置き候通り
詐偽取財の告訴に可及候。右爲念御通知申上候也。 敬具。

二月七日

山崎銀行重役

安藤隆介

馬場勝重殿

と筆太に認めてある。

私が微笑して、其手紙を緒方學士の手に戻すと、同時に、恰も
宜し、廊下に警官の足音が聞えて、二人の巡査が、息を切つて
走せて來た。

緒方氏は早速警官に委細の事情を述べて兇漢を渡し、家人の驚
くを見向きもせず、私の手を引いて歸るのであつた。間もなく
彼の沼池の大穴へは東京から刑事巡査判事が出張して、安藤氏の
死體は自動車と共に引上げられた。が其の無慘なる死體には誰れ
一人顔をそむけない者は無かつたといふ。

緒方氏の怪探偵は斯の如くして、茲に一段落を告げた。都下の

新聞は競つて此の怪事件を載せて、緒方氏の敏腕を賞讃した。
さて之で此の十三篇も終つたから、例によつて第十四篇の豫告
をする。十四篇は『奇怪の地下室』と題して、世にも恐しき怪事
件を上野、高田の兩探偵が萬死を侵して探偵する永い間の大活劇
であるが、其の波瀾曲折は、真に眼を被はしむるものがある、委
しくは其の内容を一讀して、アツと許りに驚いて貰ひたい。恐く
は何人も三嘆四賞する奇々怪々の新事件である。

穴中の慘死體終

大正五年一月十四日 發行
大正五年一月十七日 印刷

探偵叢書
第三十卷
斑の蛇
定價
五十錢

著者 高等探偵協會

發行者 矢島一三
東京市神田區表神保町十番地

發行所 中興館書店
東京市神田區表神保町十番地

(振替東京四二二三番)
(電話本局一七六五番)

印刷者 矢島懿徳
東京市神田區表神保町十番地

印刷所 中興館印刷所
東京市神田區錦町一丁目三番地

■ 大正探偵叢書 ■

● 壹冊讀切 ● 定價各拾五錢 ● 稅各四錢 ●

▲見よ神出鬼没、痛絶快絶、驚きくへ新知識の利用

▲見よ戦慄きすべ、不思議の團塊、凄絶悲惨の大活劇

6	5	4	3	2	1
伯爵少年	外交の危機	秘密の鍵	不思議の膏藥	乃木大將肖像の秘密	七人組
12	11	10	9	8	7
白面鬼	秘密の室	壯烈の死刑	少女探偵水島麗子	學士の陰謀	自殺俱樂部

發行所 東京神田區表神保町十番三(中興館)

278
125

終

